

「Temperance Union」は何故「矯風会」と訳されたのかー日本キリスト教婦人矯風会誕生当時におけるtemperanceという単語の翻訳を巡る議論とその歴史的背景

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 水産大学校
	公開日: 2024-10-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En): Woman's Christian Temperance Union; gender; Japanese social history
	作成者: 小川, 真和子
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2011858

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



「Temperance Union」は何故「矯風会」と訳されたのか？ 日本キリスト教婦人矯風会誕生当時におけるtemperance という単語の翻訳を巡る議論とその歴史的背景

小川真和子

Why did the Temperance Union become “Kyōfukai”? : The Historical Analysis of the Controversy over the Translation of the term “temperance” during the Early Days of the Japanese Woman’s Christian Temperance Union

Manako Ogawa

The Japanese Woman’s Christian Temperance Union (WCTU) was born in 1886 when Mary C. Leavitt, a round-the-world missionary dispatched by the World’s WCTU in Evanston, Illinois, came to Japan and inspired Japanese Christian women to fight collectively against social evils, especially alcohol-related problems. After Leavitt’s successful tour, the World’s WCTU sent missionaries one after another to Japan and attempted to rescue the Japanese by exporting what it believed was a universally applicable, prohibition-first policy. The Japanese Christian women who gathered around the emissaries from the WCTU, however, rejected accepting uncritically the American temperance scheme; instead, they always rewrote and nativized the ideas and strategy of its mother organization in their own terms. When they translated the term “temperance” into Japanese, they chose “kyōfū” (reforming customs), not “kinshu (prohibition)” and adopted an anti-prostitution-first policy. The Japanese women especially targeted the licensed prostitution system more eagerly than alcohol-related issues, although the missionaries preferred to focus on the latter over the former. This essay reveals the process whereby the Japanese women negotiated with the WCTU missionaries over the preference of “kyōfū” or the “kinshu” and how they transformed the late-Victorian temperance strategy according to their own cultural and social situation.

Key words : Woman’s Christian Temperance Union, gender, Japanese social history

はじめに

日本キリスト教婦人矯風会（Woman’s Christian Temperance Union, Japan, 以下、矯風会）は、万国キリスト教婦人禁酒同盟（World’s Woman’s Christian Temperance Union, 以下WCTU）の日本支部として1886年（明治19年）に生まれた。WCTUは禁酒運動の推進を主な活動目的とし、主に白人中流階級のキリスト者女性たちによって1874年に米国オハイオ州クリーブランドにて産声を上げた組織である。WCTUは2代目会頭であるフランシス・E・ウィ

ラード（Frances E. Willard）のリーダーシップの元、またたく間に全米を代表する規模を誇る女性団体に成長を遂げた。その一方、海外にも視野を広げ、欧州はもとよりアジアにも積極的に支部の拡大を図った。そして世界をWCTUのシンボルである「白いリボン」で結ぶという壮大なビジョンのもと、日本も次々にミッショナリーを送り込んだのである。しかしそのような万国WCTU本部側の意図とは裏腹に、日本でその支部を形成した日本人女性達は、ミッショナリーがもたらした社会改良運動を自分達のフィルターを通して受け止め、決してその指示に無批判に

従うことはなかった。

本稿においては、特に本来、「禁酒、節制」を意味するはずの「temperance」運動が、日本に取り入れられた際、公娼制度を初めとする社会の悪風を矯める、という意味を持つ「矯風」という、かなり広義な「訳語」が当てはめられた過程を取り上げる。単なる一つの単語の翻訳作業の背景には、アメリカの白人中流女性たちの手によって発展した社会改良運動を、日本人女性達が、自国の政治的社会的文化的背景に即して読み替えた過程が存在していた。また temperance が「矯風」と翻訳されることについて、必ずしもミッショナリー達が同意していたわけではなく、日本人は自分たちのやり方に従うのが当然、という植民地主義的（コロニアル）な立場を取っていたため、双方の間に確執もまた生じたのであった。

日本キリスト教婦人矯風会の活動に関しては、これまで数々の研究が蓄積されているが、特に近年、矯風会の活動を、国際的な文脈の中から捉える研究が相次いで発表されている^{注1)}。こういった先行研究を踏まえ、本論文においては、アメリカから日本に広まった禁酒運動が、日本で取り入れられ、定着していった過程を、temperance という言語の翻訳を巡るやりとりを中心に、当時の日米の歴史的な文脈の中で考察する。

WCTU ミッショナリーの来日

WCTU が誕生した頃のアメリカでは、ダーウィンの進化論を社会に当てはめ、その進化または退化を結びつける社会ダーウィニズムが大きな影響を及ぼしており、WCTU 会頭のフランシス・E・ウィラードもその信奉者であった。アングロサクソン民族こそが最も進んだ文化の持ち主であり、その価値観を世界中に広めることが人類の幸福につながるという見解は、キリスト教に内在する、異教徒への伝道に対する使命感とともに、ウィラードの世界観を大きく形作っていた。また一方、当時のアメリカ社会では、オリエンタリズムに基づく女性観が広く浸透していた。つまり、より「進んだ」西洋と異なり、東洋（orient）では、ハーレムに象徴されるように、女性が抑圧され、身体そして魂の自由もなく、男性の欲望の犠牲になっていると考えられていたのである。そしてウィラードもオリエンタリズムの影響を逃れることは出来なかった。彼女がサンフランシスコの阿片窟を訪問した際に目撃した中国人娼婦たちの惨状は「哀れな東洋の女の惨状」というイメージを裏打ちすることとなる。そして「東洋の墮落（oriental de-

gradation）」を駆逐し、「哀れな」アジアの女性たちを救う唯一の手だては、WCTU の活動をアジアに広げ、キリスト教を以て人々の魂を救済することであると、ウィラードは考えたのである¹⁾。

WCTU を世界組織へと成長させる際、大いに活用されたのがアメリカ・イギリス人女性宣教師たちが既に世界中に張り巡らしていたネットワークである。当時、アメリカでは女性が積極的に教会活動に参加しており、プロテスタント諸教派において婦人伝道局が設立され、女性宣教師たちは世界各地で伝道に従事していた。1884年にWCTUが最初に世界に向けて送り出した宣教師メアリー・クレメント・レビット（Mary Clement Leavitt）は、サンフランシスコからハワイ、続いてニュージーランド、オーストラリアを訪問したが、現地で彼女を迎え入れ、WCTU支部を組織したのは、アメリカ人、イギリス人の女性宣教師達であった。こうしてハワイ、オセアニアを経て最初に東洋に足を踏み入れたレビットであるが、1886年6月に来日した彼女は、まず横浜に上陸した後、続いて京都、大阪、神戸、和歌山、岡山、長崎と、アメリカ人宣教師が既に活発に伝道活動を行っていた土地を中心に訪問し、WCTUの組織化を図ったのである²⁾。当時の日本社会では、巖本善治や津田仙など、キリスト教に改宗した男性知識人たちを中心に、既に禁酒の推進を目的とする矯風会が組織されており、彼らは積極的にレビットを支援した。巖本らが、アメリカ人女性宣教師が経営もしくは援助するミッション女学校で学んだり教えたりした経験のある日本人女性たちとレビットの間に立って組織化に努めたこともあって、1886年12月6日に、東京婦人矯風会が発足したのである。³⁾ 会頭に桜井女学校（後の女子学院）校長代理、矢島楫が選ばれた。

矢島はかつて、酒に酔った夫から生命に関わるほどひどい暴力を受けことが原因で離婚をした経験を持つ。しかし、飲酒問題と個人的に深い関わりを持つ矢島が率いることとなった会は、禁酒会と名乗ってはいなかった。これは、レビットに触発されて集まった女性達が、今後の会の名前や活動方針について話し合った際、特に佐々木豊寿や海老名みやといった若手が、遊郭の急激な拡大に危機感を感じ、飲酒のみならず、広く社会問題をカバーし、風紀を矯めるための団体、つまり矯風会という名前を名乗るべきであると、矢島楫などの年長者を説得した末の決定であった⁴⁾。実は東京婦人矯風会誕生当初、巖本ら男性キリスト者たちは、婦人矯風会が自分たちの活動を支援するための、いわば男性矯風会の下部組織といった形を取ることを想定して

いたようである³⁾。しかし、男性矯風会の存在を意識するよりもむしろ、当時の日本社会の現状を踏まえた上で、改めてtemperanceに「矯風」という日本語を充てたこの女性団体は、もはや単なる男性による矯風会の女性版という立場にとどまらず、自立した独自の組織になることを目指していたのである。そして矯風会はまた、アメリカで産まれたWCTUの活動内容そのものにも翻訳のメスを入れることとなる。

「矯風」か「禁酒」か

東京婦人矯風会の設立メンバー達がかつとも憂慮したのは、飲酒による問題よりもむしろ、明治維新以降における売淫の広がりや蓄妾の習慣に代表される、性規範における二重基準であった。その為、矯風会の活動においては、当初から、禁酒よりもむしろ性の問題が大きく取り上げられていた⁴⁾。彼女たちが性の問題にいち早く目を向けた原因として、近代公娼制度の確立と遊郭の急激な発展が挙げられる。遊郭は明治以前にも存在したが、1872年に、明治新政府は、人身売買の年季契約の禁止および娼妓・芸妓の解放と賃借無効を規定した太政官布告を出す。その後いくつもの規定が出された後、1876年に娼妓梅毒検査規則が制定され、公娼制度の骨子が固まった。これらによれば、あくまでも建前として自由意志に基づき、女性は遊郭業者と年季契約を結び、管轄警察がこれらの女性に監察を付与する、それと引き換えに、女性と業者は賦金を上納することとなっていた。そして公娼は一定地域に囲い込まれ、一週間に一度、検閲をうける義務を負った。明治政府は、売淫の存在を男性にとって必要不可欠と捉え、公娼制度を敷いていたフランスなど、欧州の事例を参考にしながら、遊郭を近代化させたのである⁵⁾。そして富国強兵路線が進む中、政府は軍人の間に性病が広がることを危惧し、遊郭の拡大を図った。一方各地では新たに兵営を誘致するため、公娼設置を急いだのである。たとえば、1881年に全国580箇所存在した遊郭のうち、約41パーセントにあたる243箇所は、明治維新後、新たに作られたものである⁶⁾。

このような潮流に対抗するべく、新しく結成された東京婦人矯風会は、婚外の性的関係を否定する一夫一婦の貞操観念に基づく家族観に基づいて、公娼制度の廃止、身売りの禁止を目指した。そして早速、既婚女性の不貞を厳しく罰する一方、男性の未婚女性との性的関係を容認し、遺産相続に関しては妾が産んだ男子が、妻が産んだ女兒に優先する民法の規定を改正するよう、帝国議会に対して請願運

動を起こした。また、矯風会は「からゆきさん」などと呼ばれた女性達、つまり、海外における日本人娼婦の存在にも憂慮を示し、「在外売淫婦取締請願」の活動も起こしている⁷⁾。このように、矯風会に集った女性達は、当時まだ偏見の強かったキリスト教に改宗しただけでなく、積極的に社会活動を起こすことによって、明治初期における日本社会の秩序や既存イデオロギーへ挑戦しはじめたのである⁸⁾。

東京婦人矯風会誕生のニュースは、当時バージニア大学在学中で、後に衆議院議員となり未成年禁酒、禁煙法成立に尽力した根本正を通じて、WCTU会頭フランシス・E・ウィラードに伝えられた。ウィラードは支部が日本に誕生したことを喜び、メアリー・レビットを、日本を開国し、アメリカとの交易のきっかけを作ったペリー提督になぞらえて讃えた。日本人女性を開国させ、WCTUの活動を受け入れさせたのが他ならぬレビットだったからである⁹⁾。明治維新以降、近代化を急ぎ、1894年には日清戦争において清国を打ち破った日本は、ウィラードにとってtemperance運動を広げる上での、前途有望な国と映った。そしてこれ以降、WCTUは日本に次々とミSSIONナリーを送り出す。

“temperance” は禁酒である？ ミSSIONナリーとの衝突

WCTU本部は1892年にメアリー・アレン・ウェスト(Mary Allen West)を日本に派遣した。かつてWCTU機関誌の編集長を勤めたウェストは、東京で、根本正や、のちにハワイ総領事となる安藤太郎、津田仙らによる禁酒運動を高く評価し、彼等と活発に交流する一方、肝心の東京婦人矯風会に対しては、所詮「自称temperance unionに過ぎない」と手厳しい評価を下した。それは、根本らがもっぱら飲酒問題を重点的に扱っていたのに対し、女性達から成る矯風会が、酒よりも別の事柄に関心を移しており、WCTU本来の活動目標から大きくはずれてしまっていると、ウェストは考えたからであった。彼女にとって「本物の日本WCTU」とは、あくまでも禁酒を目指す団体であり、それは英語を話す代表者を持ち、WCTU本部とスムーズなコミュニケーションを取るべきだったのである。しかしそのような期待とは裏腹に、日本独自の道を歩み始めていた矯風会の活動は、とてもWCTUの支部として認められるものではなかった。この矯風会の現状を、ウェストは苛立ちを込めてアメリカに報告している¹⁰⁾。

このような態度に、ウェストに代表されるWCTU幹部

が、日本のような異文化圏の人々に対し、どのような態度を取っていたのか、その一例をうかがい知ることができる。WCTUの中核メンバーを占めていた白人中流階級の女性達は、地域や文化の差異に拘わらず、世界中の女性と同じ問題を共有し、解決方法もまた万国共通であると考えていた。つまり世界中にWCTUのミニチュアコピーを作ることが即ち、女性の地位の向上につながるはずであるから、日本人がWCTUの用意した運動の内容にアレンジをほどこし、日本社会の現状に即した活動を繰り広げることなど、許容できるものではなかったのである。つまり世界を自分たちの理想とするイメージに作り替えることが、WCTUの究極の目的だった¹²⁾。従って、日本の矯風会の活動が脇道に迷走しているのは、会頭である矢島の英語力不足などが原因で、WCTU本部とのコミュニケーションが十分取れていないことが原因であると見たのであろう。ウェストは滞日中、吉原遊郭を訪れ、格子の向こうに座って、男性客の「品定め」を受けている娼婦を目撃し、「自分がこれまで見た中で、もっとも悲しい光景であった」とWCTU本部に書き送っている¹³⁾。にも拘わらず、矯風会が、公娼制度廃止を運動の主軸に据える事に対しては、反対であった。

ここで、「本家」のWCTUの活動について簡単に触れてみたい。もともと、酒場を取り囲み、賛美歌を歌い、祈り、酒場の閉鎖を迫った女性たちが組織的に発展したのがWCTUであったが、2代目会頭となったウィラードの時代になると、彼女は「全ての事をせよ (do everything)」というスローガンを打ち出し、酒の問題のみならず、労働問題や女性参政権獲得といった政治問題にも視野を広げた。その一方で、東京婦人矯風会の女性たちと同じく、性の二重規範に反対し、売淫反対の声も上げているのである。それゆえ、ウィラードが目指した広い活動内容と照らし合わせてみても、矯風会の活動が必ずしもその指導方針に逆らったものではないはずであった。また、身体を拘束され、男性の欲望を満たすために格子の向こうに置かれていた吉原の女性たちは、ウィラードがサンフランシスコで目撃した中国人売春婦たちの姿とも重なるはずだ。それにも拘らず、ウィラードの使者であるはずのウェストが矯風会の廃娼第一主義に強く反対したのは何故だろうか。

アメリカでは、女性を生まれながらにして敬虔、純潔、従順であると見なし、その性欲の存在を否定するビクトリア朝的ウーマンフッドのイデオロギーがアメリカ社会を支配していた。その一方、男性の性的欲求を抑えがたいほど強いものであるととらえ、そのはけ口として売淫を肯定し

ていた点では、日本政府と同様であった。そして、ビクトリア朝的ウーマンフッドの範疇から疎外された貧しい女性が、その「性的不道德さ」を以て、娼婦として男性を性的に満足させる存在とみなされていたのである。1870年前後には、ニューヨークやシカゴ、セントルイスなど、全米の都市で管理売春が次々と導入された。しかしそのような動きは、その頃急速に成長してきていた女性団体らによる強い反対運動を巻き起こし、結局、政府当局が売淫を管理するという制度が、アメリカ国内に根付くことはなかった。

もっとも、だからといってアメリカから売淫が消え去ったわけではないのであるが、公娼制度がまさにこれから拡大しようとしていた日本と、似たような制度が廃止されんとしていたアメリカでは事情が異なっており、メアリー・ウェストにはその事情がよく理解できていなかったことが推測される。もしくは、ウィラードが持っていた壮大な「do everything」の思想、様々な社会、政治、労働問題を貪欲に扱うといった積極的な姿勢が、WCTUミッションナリーには共有されていなかったということであろう。少なくともメアリー・ウェストの目には、WCTUは禁酒促進団体として映っていた。

そしてもう一つ、WCTUと東京婦人矯風会の間には顕著な違いがあった。前者はビクトリア朝的ウーマンフッドの思想に基づき、経済や政治を支配する男性に対して、「女性の領域woman's sphere」、つまり女性の、家庭内において道徳と文化を担う者としての權威を主張し、「理想的な女性像ideal womanhood」の追求をその活動の軸としていた。その為、WCTUが繰り広げた参政権運動は、常に「家庭擁護のための参政権」というレトリックを用いていた。それゆえ「理想的な女性像」と何ら抵触するものではなかった¹⁴⁾。一方、東京婦人矯風会は、男尊女卑の色の濃い封建的な「家」制度イデオロギーに挑戦するだけでなく、国内はもとより海外にも存在している日本人娼妓の存在が「国辱」であり、公娼制度が近代国家としての日本の体面を汚すものであるから廃止するべきである、という、きわめてナショナリスティックな意識を濃厚に持ち合わせていた。言い換えるなら矯風会は、「理想的な国家像ideal nationhood」を活動の骨子としていたのである。そして矯風会が発足草々に帝国議会に提出した請願書の中には、海外、とりわけ欧米と肩を並べるためにも、廃娼が必要であるという文言が散見する。欧米からの目、つまり近代国家としての体面を気にするあまり、国内の風紀の改善を急ぐという姿勢は、WCTUには存在しない。

もっとも、もっと酒害の問題を扱え、というウェストの

主張を、矯風会側が全く退けていたわけではなかった。なぜなら矯風会はこの頃から、会員全員に、飲酒と喫煙をしないという誓約書を書かせることにしていたからである¹⁵⁾。しかし間もなく、ウェストは病に倒れ、講演の為に立ち寄っていた金沢で逝去してしまう。そのため、彼女の望み通り、矯風会の方向転換をし、禁酒促進の専門団体へと作り変えることは出来なかった。その後間もなく、東京婦人矯風会は、神戸婦人禁酒会、岡山婦人禁酒会など、他の類似団体と合併し、全国組織としての日本婦人矯風会を立ち上げた。当時の日本社会におけるキリスト教に対する反感を考慮し、キリスト教という文字は名称から省いたものの、新たに組織された会はやはり、「矯風会」を名乗っていた¹⁶⁾。そして、ウェストの期待に反して、英語を話せない矢島楫が会頭に就任したのである。

ウェストに続いて、WCTUから送り込まれたのは、クララ・パリッシュ (Clara Parrish) である。パリッシュもまたウェスト同様、日本化されてしまった矯風会の活動内容、つまり、一夫一婦の建白といった請願運動や、廃娼運動に熱心になる一方、飲酒問題がおざなりとなっている実態について、不満の意を表明した¹⁶⁾。しかしながらパリッシュは、日本側の方針を全面的に否定し、廃娼から禁酒へと運動方針そのものを転換させるのではなく、廃娼に加えて禁酒も扱う、といったように、活動そのもののターゲットをさらに拡大することによって、矯風会の中における禁酒運動の明確な位置づけを図ったのであった。そして組織を風俗部、禁酒部、教育部、法律部、伝道部というように、合計一五の部に分け、それぞれの部門に担当責任者を置くことによって組織を整理した¹⁷⁾。特にパリッシュは、禁酒運動のテコ入れだけではなく、矯風会がこれまであまり関心を払ってこなかった子どもや学生などの若年層、そして日本に滞在している北米系のプロテスタント女性宣教師達を積極的に会員として取り込むことを試みたのである。その結果、矯風会は1897年には25支部、1100人の会員を数えるまでに成長し、WCTU本部から表彰を受けることとなった¹⁸⁾。またパリッシュは、「英語が話せない」とウェストから批判された矢島楫を「東洋のフランシス・ウィラード」と誉め称え、急速に拡大した矯風会を、「小さく、冷たく、飢え、冬眠した群れから偉大で強く、社会的に認められたパワーへ」成長したとWCTU本部に報告したのである¹⁹⁾。

しかしながらこれらのパリッシュの讃辞は、彼女が矯風会の日本人女性達を自分と同等の存在と見なし、日本をアメリカと同じような近代的国家として尊重したことを示すものではなかった。1903年にジュネーブで開催された

WCTUの世界大会で、パリッシュは、このように述べている。「日本はまだ文明化された国ではない (中略) 日本が真の文明国となるには、まだまだ長い年月がかかるであろう」²⁰⁾ この発言に象徴されるような、ミSSIONナリーの西洋文明の優越性に対する絶対的確信は、日清戦争、そして日露戦争にも勝利し、次第に大国の国民としての意識を持つようになってきた矯風会の日本人女性達にとって受け入れがたいものとなってきた。

しかしながら、パリッシュが帰国した後、1902年に来日したカーラ・G・スマート (Kara G. Smart) は、そのような矯風会の意識の変化に気付かなかった。米国中西部、サウスダコタ州から来たスマートは、来日後間もなく行った演説の中で、temperanceの語の意味が、禁酒のみではなく、「世の中のすべての罪悪を去り、弊害をのぞくべき広き意義のもの」であると説いた²¹⁾。これは矯風会の従来の主張を、スマートが容認したことになる。その一方でスマートは、矯風会の活動内容に関して、正午の祈祷、WCTUのシンボルマークである白リボンの常時着用、会費の支払い、そして、全ての会員が三ヶ月以内に新会員を一人紹介すること、というような、細々とした「注意」を記した書簡を、全国各地の支部に送付し、日本人会員が「万国本部のルールに従う」ことを要請したのである²²⁾。要するに「Temperance」が「矯風」と翻訳されるに対しては異議を唱えなかったものの、あくまでもアメリカの活動方針に日本が従うべきである、というMISSIONナリーの根本的な指針に変化はなかったのだ。

そうして、使命感に満ちたスマートは、その後も組織運営のためのこまごまとした規則を作り、地方を講演、組織して歩いては集会毎に会員を訓練し、近代的な女性市民組織としての基盤作りに精を出した²³⁾。そのようなスマートに対し、日本人会員達はどう反応したのであろうか。彼女はWCTU本部に、「矯風会の会員達は自分を師と仰ぎ、素直に従い、教えを請い、喜んで批判を受け入れる」と報告している²⁴⁾。ここから、日本人達は謙虚にスマートからの助言を受け止め、正面から異を唱えるようなことはなかった様子が見えてくる。しかしその頃、矯風会幹部たちは次第に、会の真の主役はスマートではなく、自分たちなのではないか、と自問自答し始めていた。組織がまだ脆弱で幼稚であるのは確かであったが、いつまでも自分たちが諸活動において、スマートの生徒の地位に甘んじ、彼女の補助役にまわるのはいかなものか、そう、『婦人新報』は1904年の新年号の巻頭記事の中で会員に問いかける。「新年の希望」と題した巻頭エッセーは会員達にこう呼びかけた一

昨年の矯風会は近年に稀なる活動をなせり。然れども其の活動の多くはスマート嬢の働かれし所にて、一般会員は寧ろ之を幫助したるに過ぎりしは我等の甚だ遺憾とする所なり。(中略) 元来スマート嬢の我国に渡来せらるるや我等の事業を幫助せんが為にして、矯風会の後援を以て自らの事業を企んとにはあらざるなり。(中略) 既に相応の発達をなし兎に角一方の勢力たる以上は、其事業を他に委ねて単に後援をなすに過ぎるは余り不面目なる次第なるが故に、本年より我等自ら活動の中心となり、外来の応援者をして事実応援者たらしめ、以て其面目と使命を全うしたきものなり²⁵⁾。

矯風会の主役はスマートではなく自分たち、という強い意識は、その年の11月の本部役員会でのやり取りからもうかがい知ることが出来る。幹部が集まった会議において、スマートが提案した事例に対し、日本人メンバー達は、彼女の案を受け止めはするものの、後で改めて論議する、もしくは担当者と後日協議する、といった形で反応し、その場で採択することを避けている²⁶⁾。表向き彼女を立てながらも、活動の主役はあくまでも自分たちであり、スマートの言うがままにはならぬ、といった対応は、スマートが「何でもよく聞く生徒のよう」と形容した様子とは異なる。またこれらのやりとりで先立ち、1900年に書記の三谷民は、WCTU本部に宛てて送った書簡の中でこう記していた—13年前に、メアリー・クレメント・レビットがアメリカの白リボンの姉妹たちのメッセージを伝えに来日した時に誕生した小さな赤ん坊は、その産着を脱ぎ捨て、活発なワーキングパワーに成長した²⁷⁾。これは、WCTUからの独立宣言とも言える文言であったと言えるだろう。これ以降も、WCTUは更に2名のミッショナリーを日本に派遣したが、もはや矯風会が、活動の主役は誰かといった問題を巡って悩む、ということはなくなった。活動の主導権を握った日本人会員に対して、ミッショナリー達はあくまでも補佐役として、日本と本部の橋渡しをし、活動の助言をするにとどまったのである。まして矯風会に、廃娼よりも禁酒を、と主張することも全くなかった。そして矯風会は矯風会としてそのまま成長しつづけ、日本の廃娼運動をリードし続けることになるのである。

ま と め

フランシス・ウィラードはキリスト教倫理に基づき、WCTUの活動を世界に広めることによって、世界の人々の救済を企てた。そして、日本にそのミニチュアコピーを

作り、育てるべくして次々とミッショナリーを送り込んだ。彼女たちは日本人女性が、自分たちが日本人の為に用意した処方箋に従って活動することを期待していたものの、日本人女性側は必ずしも彼女たちが期待したように動かなかった。なぜなら結成当初、矯風会が近代的な市民団体としての基盤を持たず、従ってミッショナリーの指導の必要性を感じ、その指示を仰いでおきながらも、一方において矯風会員たちは、アメリカ生まれのtemperance運動を「矯風」運動と解釈し、禁酒運動にとどまらず、明治の「家」制度に挑戦し、そして身売りの公認である公娼制度の廃止を最大の目標に掲げたからである。そのため矯風会は、とてもWCTUの縮小版として解釈できるものではなかった。そのように日本独自の道を歩んだ矯風会に対し、ミッショナリー達は「誤った方向に進んでいる」として「真のWCTUではない」と酷評した。彼女達は矯風会に対して、禁酒問題「も」カバーするように、説得することに成功したものの、最終的には日本人が提唱した廃娼第一主義を認めるに至っている。

実は大正期に入ってから、temperanceという語の意味を巡る議論が蒸し返されている。1917年に、『青鞥』を主催して一躍有名になっていた平塚らいてうが、temperanceとは本来、禁酒を意味するはずであるにも拘わらず、矯風会は酒の問題に対して、おごなりの活動しかしていないではないか、と批判したのだ。これに対し、初代会頭の矢島楯を大叔母に持つ、矯風会幹事の久布白落実は、一夫一婦制が確立しているアメリカ社会と、そうではない日本では事情が異なる、その為、活動の重点が廃娼運動に置かれているのは適当であると主張して、一世代前の指導者たちの決定を擁護したのである。この論争に先立ち、矯風会は廃娼の実現のためにもまず女性参政権を獲得せよという新たな目標を打ち立てていた。大正デモクラシーの潮流の中で、女性参政権運動の大きな推進役となっていた矯風会に、WCTUミッショナリーの姿はなかった。1913年に帰国したルース・F・デービス(Ruth F. Davis)を最後に、WCTUからのミッショナリー派遣は終わっていたのである。また矯風会は、誕生当時から、WCTUの資金援助を受けてきたが、1925年になると、それも不要になったとして辞退をし、名実ともに、矯風会は独り立ちしたのであった²⁸⁾。

このように、1886年から実に30年間以上もくすぶり続けたtemperanceの訳語をめぐる論争は、単なる英語から日本語への翻訳という以上に、日米両国の政治的社会的事情の違いを考慮した上で、アメリカ人が作り出した社会改良運

動が果たして普遍的であり、文化の差異を乗り越えて世界中どこでも通用するものなのか、という疑問に対する答えを模索する過程でもあったといえるだろう。そしてその答えを見つけるべく、矯風会の日本人女性達は主体的に日本とアメリカ社会の現状を分析し、選択的にWCTUの活動を取り入れつつ、日本社会の現実にあった自分たちの社会改良運動のあり方を見つけていったのであった。

引用文献

- 1) Willard FE : Do Everything A Handbook for the World's White Ribboners. The Woman's Temperance Publishing Association, Chicago, 10-11 (1895)
- 2) Yasutake R : Transnational Women's Activism The United States, Japan, and Japanese Immigrant Communities in California, 1859-1920. New York University Press, New York, 41 (2004)
- 3) 日本キリスト教婦人矯風会：日本キリスト教婦人矯風会百年史. ドメス出版, 東京, 36 (1986)
- 4) 佐々木豊寿：東京婦人矯風会の会員愛姉に告ぐ. 女学雑誌, 56, 114 (1887); Bowles MP: The W.C.T.U. in Japan. Japan Evangelist, 32, 202 (1925).
- 5) 安武留美：婦人言論の自由－宣教師とWCTUと東京婦人矯風会, 日本研究 30, 137 (2006)
- 6) Sievers SL : Flowers in Salt: The Beginnings of Feminist Consciousness in Modern Japan. Stanford University Press, Stanford, 61 (1983)
- 7) 早川紀代：近代天皇制国家とジェンダー 成立期のひとつのロジック. 青木書店, 東京, 29-30 (1998); 藤目ゆき：性の歴史学. 不二出版, 東京, 89 (2005)
- 8) 大日向純夫：日本近代国家の成立と売娼問題. 総合女性史研究会(編), 日本女性史論集性と身体, 吉川弘文館, 東京, 99 (1998)
- 9) 安武留美：婦人言論の自由－宣教師とWCTUと東京婦人矯風会, 日本研究 30, 137 (2006)
- 10) Willard FE : Glimpses of Fifty Years, The Autobiography of an American Woman. Chicago, H.J. Smith & Co., 431 (1889)
- 11) West MA : Work in Japan. Union Signal, 5 (December 29, 1892)
- 12) Ogawa M : The "White Ribbon League of Nations" Meets Japan : The Trans-Pacific Activism of the Woman's Christian Temperance Union, 1906-1930. Diplomatic History, 31, 33 (2007)
- 13) West MA : Japan's Welcome. Union Signal, 5 (December 1, 1892)
- 14) 安武留美：婦人言論の自由－宣教師とWCTUと東京婦人矯風会, 日本研究 30, 135 (2006)
- 15) 東京婦人矯風雑誌, 54, 3-4 (1892)
- 16) Parrish C : World's WCTU. Japan Evangelist 4, 253 (1897)
- 17) Parrish C : World's WCTU. Japan Evangelist 4, 253-254 (1897)
- 18) Parrish C : World's WCTU. Japan Evangelist 5, 23 (1898)
- 19) Parrish C : Report of the Fifth Biennial Convention of the World's Woman's Christian Temperance Union, 90-91 (June 1900)
- 20) Report of the Sixth Convention of the World's Woman's Christian Temperance Union, 71 (June 1903)
- 21) スマート嬢の演説(概説). 婦人新報 67, 201 (1903)
- 22) スマート嬢の書翰に就て. 婦人新報 70, 11-12 (1903)
- 23) カーラ・ジー・スマート：北海道の大成功. 婦人新報 78, 23 (1903)
- 24) White Ribbon Bulletin (September 1906)
- 25) 新年の希望. 婦人新報 81, 1 (1904)
- 26) 婦人矯風會記事, 婦人新報 91, 29 (1904)
- 27) Report of the Fifth Biennial Convention of the World's Woman's Christian Temperance Union, 56 (1900)
- 28) Shaw MR : "Thirty-Fourth Annual Convention of the Japan W.C.T.U.," 婦人新報 328, 2 (1925)

参考文献

- Japan Evangelist
- 藤目ゆき：性の歴史学. 不二出版, 東京 (2005)
- 早川紀代：近代天皇制国家とジェンダー 成立期のひとつのロジック. 青木書店, 東京 (1998)
- 日本キリスト教婦人矯風会：日本キリスト教婦人矯風会百年史. ドメス出版, 東京 (1986)
- Ogawa M : The "White Ribbon League of Nations" Meets Japan: The Trans-Pacific Activism of the Woman's Christian Temperance Union, 1906-1930. Diplomatic History, 31 (2007)
- Ogawa M : Rescue Work for Japanese Women : The Birth

and Development of the Jiaikan Rescue Home and the Missionaries of the Woman's Christian Temperance Union, Japan, 1886-1921. U.S.-Japan Women's Journal, 26 (2004)

大日向純夫：日本近代国家の成立と売娼問題。総合女性史研究会(編)，日本女性史論集性と身体，吉川弘文館，東京（1998）

Sievers SL : Flowers in Salt: The Beginnings of Feminist Consciousness in Modern Japan. Stanford University Press, Stanford (1983)

Tyrrell I : Woman's World Woman's Empire. The University of North Carolina Press, Chapel Hill (1991)

Willard FE : Do Everything A Handbook for the World's White Ribboners. The Woman's Temperance Publishing Association, Chicago (1895)

安武留美：婦人言論の自由－宣教師とWCTUと東京婦人矯風会，日本研究 30, (2006)

Yasutake R : Transnational Women's Activism The United States, Japan, and Japanese Immigrant Communities in California, 1859-1920. New York University Press, New York (2004)

注

注1) 例えば次のような研究がある。Tyrrell I : Woman's World Woman's Empire. The University of North Carolina Press, Chapel Hill (1991); Yasutake R : Transnational Women's Activism The United States, Japan, and Japanese Immigrant Communities in California, 1859-1920. New York University Press, New York, 41 (2004)

注2) これらの請願運動は、「からゆきさん」にせよ，国内で身売りされた女性達にせよ，矯風会の彼女達に対する深い同情や連帯感から生じたというよりはむしろ，彼女たちに対する敵意，つまり遊郭が自分たちの父親や息子を堕落させる存在と見なしていたが故に始められたものであるということを，藤目ゆきは前掲書の中で指摘している。その部分に関しては，筆者も同意見である。Ogawa M : Rescue Work for Japanese Women : The Birth and Development of the Jiaikan Rescue Home and the Missionaries of the Woman's Christian Temperance Union, Japan, 1886-1921. U.S.-Japan Women's Journal, 26, 98-133 (2004)

注3) 1905年に「キリスト教」の名前が加えられ，会の名称が日本キリスト教婦人矯風会となった。